井筒

早詞

是は諸國一見の僧にて候我
此程は南都七堂に參りて候又
是よりは初瀬に參らばやと思ひ候
これなる寺を人に尋ねて候へは
在原寺とかや申候程に立より
一見せばやと思ひ候
此在原寺はいにしへ業平紀乃

ミ常の色女夫婦住なれし橋上
千歳亭風の春はおさめに白浪
太鳥の山に流れ春んもじの江
まる無事達へし　若竹の
跳ねへ見ば葉平とし見さし
見乃前けのちまいよ嫁綺を
うのきて吊り世く　あのほとよ

きらし霞にの霞あつく月も心や
すずしく世　さなぎうふ物乃
まひし浅秋乃夜あらば人の錦なる
古寺の庭の松風物凡色て月も
更さゆく軒端乃くさまでに
ほあしいしへ在ぎのつ同
まえいはきのえめまほまなくて

なりしへむ実はるしも思出の

八小代乃、何世中り脈たく

いは悲し脈く一すち小道芝佛乃

侍る港象ひきたもの清衣

あり　遂ひもてしきき秋ふ

情暖のひしくぎきもしもして

見ぬの行ゑ迄も一蒼山なもれと

下

なりめの四方の嬉乃ぞ松の韶

かみゆゆ速荒八は深くとらも

ござめなきらよ芙蓉心ば韶齊にり

さこめりまし　く　早詞　まち秋はるみ

やすらは心をすまし折なびと

なかのめかる女性達のいろ井城

能ひやりる漢形とし見ぬ闇よ

廻向の氣ともみえ然ふのためのの感
人ゆゑへとしまけれバ（こ字詞）｜こ袖なし出
あさし氣小住老なりし出る乃本敏
住家の葉変ハ庵になどめし
人なわさう被まも路乃ちゃし成
兄なる風隔乃住居らむかぎりはも
集ハちしんへ花水を向

浅語生界の中作（口字詞）｜実て葉変添
清るハ世よ出をとめし人なわ
さるをなくしじし見りは加か書かぬ
世乃者語のあとなる残じしのも
女性の情男とし家がやう母男
然ふ見る原好葉変ふばりの様
二ヽ三ヽ一ヽ（上カルヽ）一二
故なは情男やしせし（こ字詞）｜極へあは

かゝりとたまふ゛葉室の
うの時にも青男と以て神
あのましてやとも我き在よ
抜之も抜のわ気も有の家へうしろ
も使とも作はさら子なを迷
是ハ青乃亀語よりてずかう遠しく
葉室の路ハ残りてさらぬかゝ

とらし気持ぬ世語在
のさ移えとも青木との
ぬえりわ見あをりし寄落あと
ふわさゞ松も老さ深乃な
是しうて移よなるゝ語の一けう
鳥の絶よ以来乱ハいたり乃風残
其し世花ゝとして露深くこ

古塚のまことなるかな古の
跡なつかしきけしきかな
在原乃中将年経て爰に
石の上ふりにし里も花の春月乃
秋とそ住給ひしに其は
紀乃有つねの娘と契り
妹背の心あさからざりし小

まこと河内國たかやすの里に
志る人ありて二みちに忍びて
通ひ給ひしに風ふけは奥津
志ら浪たつた山夜半にや君か
獨りゆくらんとおぼつかなみの
よるの道行方思ふ心とけて
よその契りはかれがれなり

実なき巻もふうたまき濃葛を
の庵しもずらしたわなわ 者浅
園よぜ世人乃あまりゆめ写を
閉りへて門の茶井筒によわて
うなひこのおさちのささらひて
まふ数を見流かし見ありてを
なら八猫をうき心乃水も廣井

なく字流数月日もうきなるゝ家
ボミなしくりちのはしくまに
とハなわ母りるまで娘は万め男
玄葉濃露乃玉津さ累心乃巻も
ゑうひて 乍し井筒がたしふ
加巻しまいのこきかよんし
なごいれも見ゆる万よはる擬て縮

下

くは離よそ時女もくる逢し

ふわやきり見もさられ我ぬ君

なかれしへ遠めおなつくい文もし

たのひ小よ月し故なきやだらし

丹角の女とらもゆゑし八香かさ

上中地 むすめ落かふ▢なりぬなる逢し

実やふわよし桃捨ゆえぬなる係

下

蕾猿のあ庵しやぬのわれりし

下 拍 まさらしハ象え遊しつも

ぐれのおわつきの世すめせゞきさ

ちつく浪乃たちなやさ来まてし

中の米まてまつうわ 上地 来思議や

さつてえたつ山迄まついたまれ

もうれちる景の 洲浪あわつの浦迄あり

むすめ共又ハ井筒の女とも
はつかしなから我也と
いふやしめ縄のなかきよを
契りし年ハ井筒井筒の
陰にかくれけり／＼
更ゆくや
在原寺の夜の月むかしをかへす
衣手に夢待そへて仮枕
苔のむしろに臥にけり

後シテサシ
あだなりと名にこそたてれ
桜花年にまれなる人もまちけりかや
うによみしも我なれハ人
待女ともいはれしなり
井筒の昔よりまゆみつき弓年をへて
今ハなき世に業平の形見

なかひゝ浅茅さへみ直衣に
かまへてはしやさし男小
宮ゐわすれ桜をなきめくし次
筆乃袖にあて若うさす
在原のむかしはじめ家月次
さゝやまきかへつきやあらぬ
春やむかしと詠めしもぞ床乃

はやゆうゝ井筒つかほし
井筒にのけし中の詠のしさ巻
老にならし那わふかんそや
さ那のしるえしまし男乃
めふゆきなきし女せみえに
ぽとこなやりわ葉の面影
見るまえかなりしや永なきゝ

なかれりしや亡婦魄霊の姿は
志ほめる花乃色褪てまかひ
ゞのこるまてあやかりし寄乃種も
ゞ浮わくくきあくれなゐ高み
松風や色葉の姿も蔭かまて
覚まりわ露りやかまはまりわ